

学長

馬場杉夫



9月1日より、学長に就任しました経営学部
馬場杉夫です。育友会会員の皆様方には、常日頃、
専修大学に多大なるご支援ならびにご声援をい
ただき、感謝申し上げます。これまで、北海道
から沖縄まで、夏の支部懇談会では、会員の皆
様方との対話を楽しみにしてきました。また、少
しでも普段抱えておられる不安・不満を解消す
べく、取り組んでまいりました。

多くの成長体験を 積み上げている

その際、申し上げてきたことは、専修大学は、
学生さん自身、また会員の皆様が思っておられ
るよりも、こと学生の成長という視点では、非常
に良い大学である、ということです。なぜならば、
卒業時には、入学時の難易度が高いとされる大
学と同等レベルの就職先に恵まれているからで

す。その背景には、高いレベルの大学と同等以
上の成長を支える機会を数多く提供しているこ
とがあげられます。留学制度しかり、公務員や
会計士講座しかりです。また、ゼミナールを中
心とした学びを深める仕組みです。ここで多く
の成長体験を積むことができます。

成長体験の柱は主体性

ただ、残念ながら、すべての学生さんが恵ま
れた成長を果たすことができているわけではあ
りません。成長できる幅は、人によって異なりま
す。大きく成長できるかどうかのカギは、専修
大学の21世紀ビジョンである社会知性の開発に
も記してある「主体性」であると考えています。

自ら進んで取り組んでいるのか、受け身で取
り組んでいるのかによって、学びの効果は全く異
なります。例えば、筋力トレーニングでも、嫌々

主体性を育み、成長を支える専修大学に

やらされている時よりも、意識して、何のためにどここの筋肉を鍛えるのかを意識することで、筋肉の付き方が変わってきます。英語の単語を覚えることは言わずもがなです。なぜ、英語の単語を覚えなくてはいけないのか、何のために覚える必要があるのかをしっかりと認識している人と、差し当たり目の前のテストをまずまずの点数でクリアしようと思っている人の差は歴然です。ゼミナールでのディスカッションの時間も同様です。自身の成長を意識して意欲的に取り組めば、非常に多くの気づきや学びがあります。ところが、面倒だなあと考えて、できるだけ目立たずに時間が過ぎるのを待っている人には、気づきや学びはありません。

主体性の成果は時間がかかることが多い

しかし、主体的に取り組んだ結果、すぐに自身が満足いく成果に結びつくか、と問われれば、必ずしも期待する成果が得られるわけではありません。当初は筋力も目に見えて成果が表れますが、次第に成長の幅が鈍化します。英語の単語量も増えている実感がなかなか湧きません。ディスカッションの際、相手の主張を理解し、自身の意見を適切に伝えていくスキルは容易には身に付きません。半年、1年と努力を続けると、ある時、壁を乗り越えて、次元の違う自分に出会える確率が高まります。その間、不安に襲われ、これで良いのかと悩み、自分を信じて耐える期間が続きます。このやり方が良いと理解し、納得するまでに時間がかかることもあります。

これに対して、強制的に取り組む方法は、短期的な結果に恵まれやすいように見えます。当初は自身がその必要性を理解し、主体的に取り組むとしても、自分の弱い気持ちを補う、強面のコーチが、強制的に継続させると、不安や悩むまでもなく、無理やり詰め込まれます。また、どのようなやり方が良いのか、自分で考える前にある程度の結果が出やすい方法を教授されれば、自ずと、ある程度の結果はついてきます。この成功体験があれば、その先にさらに良い結果に恵まれることを多くの人が期待します。ところが、次第にやらされた感との戦いが始まります。本

当に自分がやりたいことだったのだろうか。この疑問が湧いてくると、もはや強制的に取り組ませることはできなくなり、さらに良い結果は霧消していきます。

教員の葛藤

我々教員は、ある程度道は作りながら、どこかで「自分で決めている」という認識を得る機会を与えようとしています。教員も結果が出ると自分のこと以上に嬉しく感じます。だから、ついつい、手を出し、やり方を教え、安易な成功体験を積み重ねようとしてしまいます。しかし、学生が付いてこれなくなることも少なくありません。そうか、ここまで手を出してはいけないのか、と気づきますが、そうすると、教員や学生が期待する成果に到達しないことも出てきてしまいます。教員が手を出しすぎると、その成果は、学生の成果というよりは、教員の成果と言った方が良くなってしまいます。日々教員は、どこまで手を出すのが学生にとって良いのかを悩みながら指導しています。

主体的な活動による成長

確かに、自分で悩んで、迷って、決心して取り組んだことは、もしかすると成功しないかもしれませんが、それでも、何がダメで、どこが良かったのか、自分に向き合っていることだけは間違いありません。自ら主体的に取り組んだ場合、そこから、次は何をするのか、どうしたら良いのかを自分で考えられます。まさに「成長」しているのです。人生100年時代、こういった自分で取り組める力こそが、ハッピーな職業生活の原動力ではないかと信じています。

学生がもっとも成長できる大学

専修大学が、世界でもっとも学生が成長する大学になることを目指していきたいと考えています。そのためには、様々な意見に我々大学人が耳を傾けて、学んでいかなければなりません。これからも、忌憚のないご意見をいただければ、うれしく思います。

ばば すざお

経営学部教授。1966年生まれ、横浜育ち。1995年慶應義塾大学商学研究科後期博士課程単位取得退学。同年専修大学経営学部講師。助教授をへて2003年教授。慶應義塾大学より2005年博士（商学）。2012年より学部長、2016年より専修大学学長職務代行、2021年より専修大学大学院経営学研究科長。専門は戦略経営論。趣味のマラソンでは2012年長野マラソンにてサブスリー達成。